

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-169	21-329	慶應義塾大学 加藤眞三
<b>題名 (原題/訳)</b>		
<p>A systematic review and meta-analysis uncovering the relationship between alcohol consumption and sickness absence. When type of design, data, and sickness absence make a difference</p> <p>システマティックレビューとメタアナリシスで明らかになったアルコール摂取と病気による欠勤の関係。デザインの種類、データ、病気欠勤</p>		
<b>執筆者</b>		
Neda S Hashemi <sup>1</sup> , Jens Christoffer Skogen <sup>1,2,3</sup> , Aleksandra Sevic <sup>1</sup> , Mikkel Magnus Thørrisen <sup>1,4</sup> , Silje Lill Rimstad <sup>1,5</sup> , Hildegunn Sagvaag <sup>1</sup> , Heleen Riper <sup>6,7,8,9</sup> , Randi Wågø Aas <sup>1,4</sup>		
<b>掲載誌</b>		
PLoS One. 2022 Jan 11;17(1):e0262458. doi: 10.1371		
<b>キーワード</b>	<b>PMID</b>	
病気欠勤、アルコール使用	35015789	
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b> 先行研究により、アルコール使用と病気でないことの間に関係があることが明らかになっている。このレビューの目的は、デザインの種類（横断的対縦断的）、データの種類（自己申告対登録データ）、病気欠勤の種類（長期対短期）の違いを見ることで、この関係を探り明らかにすることである。</p> <p><b>方法：</b> 2020年6月までに6つのデータベースを検索した。1980年から2020年までの、労働人口におけるアルコール摂取と病気欠勤の関連について結果を報告している英語またはスカンジナビア語の観察研究および実験研究を対象とした。品質評価、およびサブグループレベルでの病気欠勤の可能性の違いに焦点を当てた統計解析は、各研究ではなく、それぞれの関連について行った。病気欠勤の可能性の差は、メタ分析によって解析した。PROSPERO 登録番号。CRCD42018112078。</p> <p><b>結果：</b> 15カ国、439,209人（最小43人、最大77,746人）の従業員を含む59の研究（58%が縦断的）が含まれた。肯定的で統計的に有意な結果を示した関連性のほとんどは、縦断的データに基づくものであり（70%）、アルコール使用と病気欠勤の強い/因果関係を確認するものであった。メタ分析には8つの研究（10サンプル）が含まれていた。病気欠勤のリスク増加は、横断的研究（OR: 8.28, 95% CI: 6.33-10.81）、自己報告による欠勤データを用いた研究（OR: 5.16, 95% CI: 3.16-8.45）、短期の病気欠勤を報告した研究（OR: 4.84, 95% CI: 2.73-8.60）に見られた。</p> <p><b>結論：</b> 本レビューは、アルコール使用と病気欠勤の関係に関する以前のエビデンスを支持するものであるが、同時に挑戦的なものでもある。ある種のデザイン、データ、病気欠勤のタイプは、大きな効果を生み出す可能性がある。したがって、アルコールと病気欠勤の実際の関連を調べるには、登録データを用いた縦断的なデザイン研究を作成し、レビューし、この関連のばらつきをカバーし説明するサブグループ分析を行う必要がある。</p>		